

「宝の島」

松前小島「宝の島」

松前小島は、松前町の沖合約24 kmに位置する周囲約4 kmの無人島です。

周辺は海食崖で囲まれ、島の大部分は火山の噴火によつてできた安山岩で形成されています。頂上の周囲には、旧火口とみられる窪みと平坦な面があります。

また、ケイマフリやウトウ、ウミネコなどの海鳥の繁殖地であり、イタヤの林と冷温帯の草原が発達しており、天然記念物（天然保護区域）にも指定されています。

一帯の海は、海産物の宝庫となっており、漁場としても大変重要な役割を担っています。

「宝の島」とも言われ、かつては夏場に島に渡り、漁をした人が多くいました。

昭和20年代から40年代にかけて、石川県輪島から来ていた海女さんが、昆布漁やアワビ、ウニ漁をして生活していた歴史もあります。

松前小島

江戸時代の松前小島

延宝元年（1673）に、松前藩主の所有する船が松前小島沖で難破したという記録があるほか、元禄13年（1700）の「松前島郷帳」でも松前小島の名前が記されています。

また、宝暦年間（1751～1763）に描かれた「松前屏風」でも松前小島を見ることが出来ます。

文化4年～6年（1807～1809）に編纂された「村鑑下組帳」では、松前町の商人によって「大嶋場所」「小嶋場所」と呼ばれる漁場が経営され、魚油、フキ、トド肉が主な産物だったと記されています。

幕末の探検家が記した「再航蝦夷日誌」では、弘化3年（1846）当時、「小島には船瀬が1カ所あって、近くには番屋が建てられ、夏期には小島に出張してトド漁をしている。その他、海藻やナマコ、アワビが多い」と記されています。

松前小島の再興

北朝鮮船の漂着

松前小島は、松前に住む人たちによって、古くから大切にされてきました。

しかし、平成29年11月28日、北海道警察と第1管区海上保安本部が、松前小島に接岸している木造船を発見しました。

船は北朝鮮の船で、北朝鮮籍の乗組員10人は、避難するために松前小島に来たことが明らかとなりました。

甚大な被害

しかし、木造船からは、複数の日本製の家電が見つかり、乗組員は「テレビや冷蔵庫は島から持ってきた」と話しました。

松前小島漁港内の管理小屋や物置、敷地内は荒らされ、家電や発電機などの他にも、灯台施設の電源用ソーラーパネルが盗まれて

いました。その被害総額は、1千万円以上にのぼりました。



家電などが盗まれ、室内が荒らされた管理小屋

安全操業への懸念

冬の海は、午前中に波が穏やかでも、突然しけ始める恐れもあり、松前小島周辺で操業する漁業者にとって、島の管理小屋は、安全に操業するための重要な施設です。

松前小島周辺で、岩ノリ

漁を行う漁業者や、夏の昆布漁、マグロ漁を行う漁業者など、年間200〜250隻の船が松前小島に入港します。

しかし、備品が盗まれ、室内が荒らされた管理小屋は、復旧まで使用できず、日帰りの漁さためらわれる状況であり、島での漁業活動にも支障が生じたことから、漁獲量などへの影響が出ました。

また、復旧しても、今後不審船が来ないという保証は無く、安全な操業に暗い影を落としました。

全国からの支援

そんな中、町や漁協などに、道内をはじめ、新潟県や富山県など全国各地から、支援に関するお問い合わせをいただいたことから、施設の復旧のため、寄附金を受け付ける協議会を平成29年12月に設立し、受付を開始しました。

被害からの復旧

乗組員が結核に感染していたことを受け、松前さくら漁協は、小屋内部の消毒作業を行いました。

また、道内外から102件、7百81万3千百12円もの寄附金が寄せられ、被害の復旧や備品の購入などに充てられました。

現在は、寄附金を活用して進めていた、施設の復旧工事も終了し、北朝鮮船が漂着する前の、安心して操業ができる日常を取り戻したいと期待が持たれています。



復旧した管理小屋

島開き

そして、7月20日には、例年通り「島開き」が行われました。

島開きは、豊漁や安全を祈願する恒例行事として、昆布漁期に合わせて毎年実施しており、当日は天候にも恵まれ、漁業者など約70人が、島の中腹にある厳島神社に参拝しました。

多くの皆様のご支援ご協力に改めて感謝を申し上げます。



厳島神社での祈願